

---

# ハロウィンタウンRPG-U18

悠久剣士

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ハロウインタウンRPG - U18

### 【Nコード】

N8552Y

### 【作者名】

悠久剣士

### 【あらすじ】

主人公スバルは、MMORPG『ハロウインタウンRPG』において最速でレベル上限に達しており、上限解放待ちの暇潰しに女格闘家<sup>キャラ</sup>を育てていた。ソロ廃人プレイのみで戦ってきたスバルを、自分たちのチームに引き抜こうと企む輩がゲームや現実世界で、スバルをあの手この手で勧誘してくる…。ノクターン掲載の『ハロウインタウンRPG』R15版です。

## 凄いご褒美あげるよ

Trick or Treat!

お菓子をくれなきゃ、悪戯しちゃうぞ。

Trick or Treat!

お菓子をくれなきゃ、悪戯しちゃうぞ。

『ハロウィンタウンRPG』は、昨年夏に発表されたMMORPG。そのゲームシステムは、何処にでもある、何の変哲もないウオオペレーションのオンラインゲームだ。

もちろん仮想空間バーチャルスペースにプレイヤーが入り込んで、キャラクターを自分の手足のように動かすような、夢の超未来型ゲームシステム等ではない。

ハロウィンは、極々普通のゲームだったが、それでもフルボイスチャットや、脳波をキャッチしてプレイヤーの感情をキャラクターの表情で表すなど、先進的な技術が投入されていた。

プレイヤーがイライラしているときは、キャラクターもイライラした顔になる。

たいした機能ではなかったが、ゲーム内でのコミュニケーションには、革新的な変化をもたらした。

「ごめんね、遅刻しちゃった(笑)」

「ううん、ぜんぜん気にしてないよ(怒)」

「私も今来たところですよ(殺)」

「も、申し訳ございませんでした(汗)」

「謝ることないですよ(殺)」

当初は、不評だったシステムも時間と共に「ハロウィンって、妙にリアルじゃないか？」と徐々に好評に変わって行った。この評価を運営会社である北米のIndivER社のオンラインゲーム部門は、他のMMORGと差別化ポイントだと考え、その後のアップデートでは、嘘発見器を応用した『本音システム』を採用した。

「アンタなんか、大嫌い！」と言ったはずのプレイヤーの言葉は、フルボイスチャットで変換されて「君のことが好きだぞ」と相手に本音が筒抜けしてしまう。

当然、同アップデートも大不評を買わずだったが、この『本音システム』のお蔭でプレイヤー同士が結婚できたり、付き合いたくもない人間関係を清算出来たり、概ね好評であった。

ただし『本音システム』に関しては、後のアップデートでプレイヤーの感情が高まったときのみ発動と、条件が追加された。なぜならリア友（現実世界の友達）に対して、あまりに本音を言い過ぎてなかなか誘えないとゲーム加入者が鈍化したからである。

Trick or Treat!

お菓子をくれなきゃ、悪戯しちゃうぞ。

「@3（あと3分）くらいなら支援スキルが持つけど、もう一度アタックする？」

スバルは、パーティーメンバーの三人に確認したが、誰も返事がなかった。さすがに深夜二時過ぎて、レベル稼ぎだけの退屈な狩りに、みんな寝落ち寸前ということか。

「ごめんなさい・・・さすがに寝ないと、明日起きれないから落ち

ます」

まだまだ狩り足りないスバルを察して、切り出しにくそうにログアウトを宣言したのは、戦闘に不向きな生産キャラの女ドワーフの『カナタ0913』だった。彼女は、アタッカー（叩き役）としてパーティにいるが、攻撃力の少ない短剣を装備して、明らかにお荷物だった。アタッカーなら攻撃力の高い太刀か、範囲攻撃の出来る槍で、ガシガシ叩くのが定石だ。

スバルは、ほかの二人が口に出さなくても、緩慢な動きからこれ以上、このメンバーで狩りを続けても効率が悪いと考えて、自ら解散を宣言した。

近くの街に戻ろうと女聖職者の『優子』は、ワープの範囲スキルを唱え始めると、男エルフの『アキラxcodomo』がスバルをスキル効果範囲外に押し出した。

「俺は、もう少しレベル稼ぎたいんだけど、スバルさんは、もう寝るの？」

「ちよ、荷物整理したいから、街に戻りたかったのに」

スバルとアキラを狩場の『蠍の草原』に残して、優子とカナタは、光が集束する魔方陣に吸い込まれた。ヒーラーの固有スキルであるワープは、詠唱中に魔方陣から足を踏み出すと、乗り遅れることになる。

仮初の仲間が消えた直後、スバルのポケットには、友達カード（メール）が飛び込んできた。

<優子：また狩りに行きましょう。ごめんなさい、アキラ天然なん  
で怒らないであげてね>

先ほどのパーティ内でヒーラーを務めていた優子からの手紙だった。彼女との狩りは、初めてだったが、タイミングよく回復する姿は、かなりゲームを遣り込んだプレイヤーだと解った。

「ごめん・・・スバルさんが寝ないなら、ペア狩りに付き合ってもらおうと思っただけ」

「まだ寝なくても大丈夫だけど。サソリ狩りは、回復スキルのない格闘家と弓使いだと厳しいよ。城下街まちに戻りながら、街道沿いにいるオークとゴブリンでも狩る？」

そして優子の連れだったアキラとカナタは、明らかに無駄な動きが多くゲーム初心者だろう。アツカー二人でペア狩りなど効率が悪く時間の無駄なのに、聖職者の優子ではなく、格闘家のスバルを残したのも、初心者の証拠だ。

スバルは、荷物の中から青色のキャンディを取り出すと、五粒をアキラに渡した。

『ハロウィンタウン』は、何の変哲もない多人数参加型MMORPGで、モンスターを倒すと手に入るキャンディが、HP回復やステータス強化などのアイテムとなっている。スバルが取り出した青色のキャンディは、HP回復のアイテム。5粒は、4つあるポケット（ショートカット）1つに入る上限だ。

「これ何？」

「HP回復のキャンディも知らないの？」

「うん、いつもは、優子と一緒にしか狩りしないから・・・どうやって使うの？」

スバルは、アキラに使い方を説明すると、彼は、さっそく1粒飲んでしまった。解散時に優子が全回復フルしていたので、効果のほどを実感できなかったようだ。

スバルは、白いチャイナ服の首元を緩めると、狩場入口までアキラを連れて行き、大きな岩の上に腰を下ろした。草原より一段高い

岩の上は、グラス・スコープオンの湧かない安全地帯だった。

アキラは、リア友（現実世界の友人）の優子に誘われて、女ドワーフのカナタと、先週からゲームを始めたばかりだと言った。

< 優子ってプレイヤーは、ずいぶん面倒なエルフを押し付けたな・  
・ >

スバルは、弓使いに戦闘を指南できるほど、Lv20前後の弓のスキルを知らなかったが、初心者にゲームの楽しみを教えるのも、先輩の責務でもある。スバルは、さして興味のなかった弓使いスキルをネットで調べ始めた。

アキラは、しばらく目を閉じて黙り込んだスバルに「もしかして寝ちゃった？」と聞くと、自分も睡魔に襲われてきた。経験者なら理解できると思うが、ゲーム内でパーティメンバーが寝落ちしてしまった場合、なかなか相手を放置してログアウトし辛いものだ。とくにプレイヤーキラー（PK）上等のハロウィンでは、街の外での寝落ちで身包み剥がされる危険もある。

スバルは、寝落ちしていない証拠に、アキラの手を握ったり、抱擁したり、ダンスを踊ったりとショートカットを駆使しながら、アキラを飽きさせないようにして、手早く弓使いのスキルを把握した。

「ス、スバルさん・・・あの恥かしいから、こんな所で抱き着いたりしないでくださいよ」

ボイスチャットの向こう側のアキラは、ゲーム内でのアクションに本気で照れている。スバルは、ヘッドセットを通じたアキラの初々しい反応に、ちょっとだけ悪戯心が芽生えた。

ハロウインは、ボイスチャットを全面採用しており、その際プレイヤー保護を目的に、プレイヤーの声は、キャラクターに違和感ないように調整されている。美形のエルフは、それに相応しいイケメンボイスだった。

<イケメンのエルフをチョイスするのは、アキラが童貞だからだよ・  
・クスクス>

ハロウインが別名『ナンパRPG』と揶揄されるのには、二つの大きな理由がある。一つは、ボイスチャットの採用と、戦闘と無縁の多彩なモーションにより、街の至る所でナンパ行為が横行していることだ。

エルフは、キャラクターエディットを適当にしても大抵イケメンに仕上がるので、ナンパ目的でゲームをしている童貞男子は、ほとんどエルフを選択する。低レベルのエルフは、ステータスも遠距離系に特化しており、逃げ回りながら弓を射るしか出来ない。ゲーム玄人（廃人クラス）は、エルフを選ばない。

それにゲーム初心者のアキラが、なぜ多彩なアクションを使いこなせているか？ プレイヤーの頭に巻かれた装置が脳波を感知して、キャラクターの表情や行動を補助しているからだ。ただし戦闘や移動に関しては、従来のマウスオペレーションが採用されている。ハロウインは、あくまでゲームであり、任意ではない行動を抑制するためだ。

スバルは、一通り弓使いのスキルを説明すると、腰に手を回して抱き合った。スバルの萌え萌え攻撃に、画面の前でアキラがズボンを降ろしていると想像すると、彼女は苦笑してしまった。アキラがズボンを摺り下げたのかは、普段からエルフを色眼鏡で見ているスバルの妄想でしかない。

<アキラくんは、童貞確定だね>

「今日は、私が適当にモンスターを狩るから、アキラは、弓の通常攻撃で体力削ってね。必殺技とか使つと、攻撃対象がアキラに移って面倒だから」

「うん・・・えーと、ありがとう」

「もしもアキラが、死なずに街まで辿り着いたら、凄いご褒美あげるね」

「凄いご褒美・・・な、なんだろう」

スバルは、アキラに弓使いの初期スキルを叩き込むと、城下街まで雑談をしながらペア狩りを開始した。格闘家のスバルは、自分が囿になってモンスターを引き付けると、アキラに後方から攻撃させた。

サブキャラのスバルは、メインキャラの豊富な資金を流用して眺えた白いチャイナドレスを着ており、低レベルのモンスターの攻撃ならば、いくら喰らつてもへっちゃんだった。

ただスバルが無敵だと、さすがのアキラも飽きるだろうと、わざと大声で「アキラ、助けてえ〜」とか演出した。こうした配慮で初心者にゲームの醍醐味を教えるのも、RPG（役割を演じるゲーム）の面白いところだ。

街が視界に入ると時計の針は、午前三時を回っていた。

「アキラは、優子と友人なんでしょう?」

「うん」

「彼女のメインキャラは、たぶん高レベルだし、ベテランの部類だ

と思うけれど、彼女からゲームのレクチャー（説明）を受けなかったの？」

「優子の聖職者は、確かにサブキャラだけど、どうして解るの？」

「『ハロウィン』では、キャラを3人まで同時育成できるけど、不正防止のためにIDと名前が1つしか作れないのよ。私の『スバル』みたいに、名前の前後にアルファベットや数字を入れていない名前は、かなり初期にゲームを始めた証拠なんだ」

「俺は、『アキラ』で入力出来ないから『アキラxcodomo』にしたけど・・・なるほど『優子』みたいな名前は、参加人数の少ない初期にしか付けられないのか」

「そうそう」

「なら『スバル』もメインは、高レベルってこと？」

「そうそう。メインは、レベル上限の解放待ちよ」

ハロウィンでは、狩りで集めたキャンディを使ってステイタスを強化するほか、戦闘による経験値でステイタスが向上するレベル制が採用されており、現在Lv80が上限となっている。レベル上限は、運営の怠慢で半年以上解放されておらず、高レベル者には、別キャラを育てる者も少なくなかった。

「メインも格闘家なのかな？」

「アキラが、もう少し成長したらメインを紹介してあげるよ」

「・・・きつとメインも可愛いよね」

「どうかしらね」

「そ、それより、もうすぐ街に着くよ・・・ご褒美って何なのかな？」

スバルは、ご褒美に期待して顔を赤らめている美男子が、すごく可愛いと思った。

スバルは、少し悪戯っぽく笑うと、初心者のアキラは、ハロウインが『ナンパPRG』である最後の理由を知らないと思った。

ハロウインで採用された画期的ともいえなくもないステータス『愛』は、キャラクター同士でイチヤイチャすることで向上し、愛が100%の状態で戦闘用のステータスが一定時間5割増しになる。このため経験値稼ぎの狩場では、しばしば抱き合っているカップルの姿が見られる。

通常は、愛着のある自らの分身を他人のオカズにされることを嫌って、サーバー内のパーソナルスペース『自室』か、所属するチームで所有している『部室』で、気の合った仲間同士でイチヤイチャするものだ。

『天上戦』と呼ばれるチーム同士の大規模戦争では、自室の使用が制限され、フィールド上の全てがPKエリアに解放されるため、街の内外に限らずイチヤイチャするカップルが現れたりして、まさにゲーム内が混沌に包まれる。

ちなみにスバルは、正規サービス開始からトップランカーをソロプレイで駆け上がったため、抱擁より先の『愛』を試したことがなかった。抱擁に始まって最後まで出来るのは、知識としてあったが、気心の知れた仲間清纯派を通してきた手前、今さら『してみたい』と切り出せず、更に彼女の内向的にして攻撃的な性格は『誰でもいいからしたい』とも頼めるはずもなかった。

スバルは、結果的にゲーム内の処女を守り抜いたため、彼女を知るプレイヤーは『鉄の処女スバル』と、何処かの国の拷問器具のよくな通り名で呼んでいた。

<アキラなら後腐れなくキスできるけど・・・せつかく今まで我慢してきたのに、ファーストキスの相手が童貞臭いエルフで良いのかな?>

スバルは、理解し難い思考迷路に迷い込んだようだ。所詮バーチャル、されどバーチャルである。息遣いが乱れているアキラは、既に臨戦態勢が整っているようだから、さっさと街に戻って自室に連れ込んでキスをしてやれば良いのに、妙な緊張感が二人の間に流れた。

「ア、アキラは・・・優子から、その狩りに行く前とかに抱きしめ合ったりとか・・・それ以上というか」

「スバルに抱き着かれたのが初めてだよ」

「そうなんだ」

「優子は、スバルなら色々ゲームのこと教えてくれるよって、ペア狩りを勧めてくれたんだ」

「わ、私、そんな色々知らないよ」

「けどレベル上限なんだろ？ 何でも知ってるでしょう？」

「な、何でもは、さすがに知らないよっ」

優子とアキラがリア友ならば、ゲーム内でキスとかするのが恥かしいのだろう。案外、アキラを置いて帰った優子は、その辺の説明を、同じベテランプレイヤーのスバルに任せたのかもしれない。そう考えたら彼女は、急に恥かしくなった。

<優子は聖職者のくせに、私にアキラの相手をさせたいの？>

スバルは、自分からご褒美をあげると煽っておいて、いざ街が近付くと臆病になった。

彼女は、自分の唇に指をあてると、彼女のキャラクターは、みるみる頬を上気させて、いやらしい女の子の顔になった。プレイヤーの感情の変化が、キャラクターのスバルにシンクロしているのだ。

<そうかスバルは、こんな顔も出来るエッチな娘だったのか・・・

知らなかったよ>

アキラは、凄いご褒美が『キス』だと理解できずに、頭の上に？マークを3つほど出して首を捻っていた。

二人は、街までの数分のところで、モンスターを操る謎の男ダークエルフに、無防備な背中を晒していた。謎の男は、短剣をキラリと輝かせた。

漉いご褒美あげるよ(後書き)

ノクターン版を改稿して連載しております。  
不定期更新です。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8552y/>

---

ハロウィンタウンRPG-U18

2011年11月25日18時50分発行